

図書館における学習支援実態調査アンケート実施報告

- 実施期間： 平成 27 年 12 月 1 日（火）～12 月 24 日（木）
- 対 象： 本学学生・院生・教員
- 実施方法： Google フォームを使った Web アンケート、無記名
- 回 答 数： 学生 519 名（学生 490 名・院生 29 名）
（在籍者数：4,965 名・157 名・回答率：10%）
教員 41 名（アドレス数：182・回答率：23%）
- 目 的： 図書館利用者のニーズ把握や学習支援環境の整備状況を知る。
教育の質向上と学習支援の充実を目指す。
学習環境の充実に資する学術情報基盤を整備し、課題解決や自主的な図書館利用促進を目指す。
- 実施体制： 担当－参考係
協力－閲覧・LC・AV 係、学生コンシェルジュ、学生アルバイト
- スケジュール： 11/20 専任会議へ提案 12/1～アンケート開始・HP・掲示開始（～12/24）
12/24 アンケート終了 1/5～集計
1/22 専任会議報告
2/1～2/4 学生向けアンケート実施（再）
2/3～2/12 院生向けアンケート実施
※学生ポータル不具合につきメールへ切替
2/15 運営委員会へ報告
2/17 図書館委員会へ報告・図書館 HP で報告
- 広 報： 図書館 HP、Facebook、Twitter、一斉メール、学生ポータル、口頭での呼びかけ
- 評価及び報告： 事後反省会－参考係・LC 係
報告－専任会議・図書館委員会へ報告、図書館 HP へアンケート集計結果掲載

総 括：

今年度は Google フォームを使った Web アンケート調査を実施し、集計作業の効率化を目指した。企画運営・実施までのスケジュールや仕事の割り振りを参考係が担当し、アンケート内容の加筆・修正を図書館全員で行った。また、集計の情報・データをシステム係と共有し、作成に関するノウハウのサポートを e-キャンパスセンターに依頼した。

質問事項が 21 項目（教員向け－22 項目）と、昨年（20 項目）を上回ったが、所要時間が 5 分（昨年－10 分・記入式）と短く、回答者の負担が少ないことを鑑み Web アンケートに絞った。しかし、Web アンケートや口頭での呼びかけに頼ってしまい、SNS や学生ポータルを活用した割には、目標の回答数（総数 1,000 名）を達成出来なかったのが残念であった。さらに当初予定していた院生からの回答を学生ポータルでは運用が難しいことが判明し、メールへ切り替えたところ、短期間で 29 名の回答を得ることができた。今後は図書館からのお知らせを情宣する際、メールに加え 14 号館

への掲示、大学院 HP に掲載を依頼するなどの対策が必要である。

学生・院生／教員向けの両アンケート回答結果から、図書館界の近年の動きと同様に本学図書館も実質的な「学び」「集い」の場、学生生活や研究活動の中心となっていることが確認できた。

また、図書館の施設・機能を理解し自発的に使いこなせる利用者（積極的利用者）とそうでない利用者（消極的利用者）との差が大きいことや、ガイダンス・データベースの利用教育の普及活動、図書館サービス、学習及び研究支援が実践できているかどうかを検証することができた。

利用に関する統計データの分析では、年間 26～27 万人を推移していた入館者数がラーニング・コモンズを設置した平成 25 年度以降は、前年同月を約 20 パーセントずつ上回り、平成 27 年度（2 月現在）は 32 万人に到達する見込みとなっている。

また、図書館の滞在時間も全体平均が 1 時間という数値に対して、とりわけ経済学科、英米学科、子ども家庭福祉学科が他学科に比べて平均 2～3 時間と図書館で過ごす時間が長いという結果が出ている。入館者数の内訳にも比例しており、英米学科やライフ・ウェルネス学科の 1～2 年生においては、語学スキルの学習利用と AV コーナー利用（DVD 視聴）が多いのも特徴として挙げられる。4 年生は総じて滞在時間が 3 時間以上と他の学年よりも長かった。滞在時間の数値は、新学期や就職活動・定期試験期間などの年間行事に応じて推移することが確認できた。

一方で平成 23～26 年度まで年間 5 万冊を推移していた貸出冊数が、平成 27 年度（2 月現在）は 4 万 6 千冊と過去 5 年間で一番低い数字となっており、不読率の高さと読書量の少ない利用者の実態が明らかとなった。

読書離れを防ぐためには読書活動の推進や授業との連携が必須の課題である。入学者数の減少とからめつつ、貸出冊数減少の原因の調査とその対策についての継続的な検討が必要である。

ラーニング・コモンズは、学生と教職員や学生同士が自由に話せる「対話」を中心とする空間であり、今の時代には不可欠である。本学におけるラーニング・コモンズの認知度は、ほぼ定着した感があり、好んでこの場所を利用するリピーターも増えつつある。ゼミや授業、電子ホワイトボードを活用した学生同士の自主的な勉強会も継続化し、定期的に読書会を行うなど、学生コンシェルジュの活動も活発化してきた。“学生とつくる図書館”をコンセプトに、協働しながら利用者支援を目指していきたい。

前年度と同様にパソコン環境の充実（台数増や LAN 接続、印刷の不具合）を要望とする意見も多く見られたが、接続がスムーズにいくための無線 LAN の工事が 3 月に行われるので、今後は解消すると思われる。

また、図書館内での食事や休憩スペースの拡充に関する要望も多かった。最近の新築の図書館では長期滞在型の機能を備えたづくりが主流となっており、築年数 21 年の本学図書館は設備の老朽化が著しく、長期的な営繕計画を見据えた図書館運営が必要となる。既存の施設を活かした快適な環境づくりと、図書館サービスが向上するための検証を今後も続けていきたい。現在、2 階・3 階フロアをサイレントゾーンと位置づけており、サインの統一化と利用者の学習環境が保全されるよう、ゾーニング化と館内の見回りを強化する。

アンケート期間にあわせて、途上国の教育問題に関する映画上映会やデータベース講習会、資料展示などのイベントを企画し、図書館活動に興味・関心を抱いてもらえるような“しかけ”を行った。多様化する利用者のニーズへの対応と、広く内外へアピールすることを「ねらい」としたが、積極的なアピールが足りずアンケート回答数にも効果が出なかった。さらなる広報力の改善策が求められる。

学習環境を充実させるためには、学術情報基盤の整備と人的支援サービス、学生協働サポート体制、図書館スタッフによる運営がバランスよく稼動しなければならず、デジタルコンテンツの整備や情報を発信する力も必要である。

利用者側の視点に立ち、何を求めているのかといったニーズの把握と、スタッフが“協力的”“親しみやすい”といった印象づけとなり、ひいては教育支援のアプローチにもつながる。

大学図書館の使命は、教育と研究を支援することである。主体的な学習のベースとなる図書館の機能を強化すること、学ぶことの楽しさを実感させることが学生の自発的行動につながり、自身のアイデンティティーの確立や目的意識を発達させることで、社会が求める力の育成となり、アクティブ・ラーニングへの転換にも対応できると考える。今回の反省点をふまえ、アンケートで出された図書館における研究・学習支援の実態及び要望を真摯に受け止め、日々の業務を見直し、環境整備とサービス支援の改善策に努め、効果測定の継続を実施していきたい。

以 上